

第 63 回国際理解・国際協力のための全国中学生作文コンテスト東京都大会 金賞

私立創価中学校 3 年

栗田 秀明

課題②

「核兵器のない世界」に向けて国際社会ができることは何か。

僕は小さい頃、姉とよく姉弟けんかをしていた。その原因は、ささいなことであつたがお互いが強いプライドを持っていたため、それぞれの気持ちを知るためにお母さんは、
「話し合いなさい。」

とよく言っていた。また、それでも話し合いをしないときは、仲介に入ってどちらの話もよく聞いてくれた。それによって、お互いが分かり合えて、暴力になるけんかはそこまでなかった。この話し合う対話の力こそが、核兵器のない世界に向けて政府が行うべき大切なことだと僕は思う。そして世界の人々に求められているのは、核兵器の歴史をたくさんの人が知る機会を持ち、人々に伝え、核兵器は絶対にいけないという、世界としての共通認識を持つことであると思う。

大きな進歩として今年の G7 サミット(先進国首脳会議)が、原子爆弾が初めて投下された広島
の地で開催されたということが挙げられるだろう。開催地が広島になると発表されると、世間で賛否
両論の声が上がっていたのも事実である。しかし僕は、この核兵器廃絶問題に対して、この先核兵
器が使用されないように、日本の被曝の歴史を世界に発信していくことが最善であると考えている。
そのため、先進国である 7 カ国の各首脳に被曝の歴史を見てもらったということは、核兵器廃絶に
向けた大きな一歩だったと僕は考える。こうした、国際協力に基づく話し合いが行われることで、国
民にも大きな影響を与えていると思っている。その根拠として、G7 サミットが行われたあと、開催地であ
った広島原爆資料館では、たくさんの外国人観光客が訪れ原子爆弾の歴史を自ら学んだことで、
来館者数が倍近くまで増えたという。このように、政府が国境をこえた対話を進め、核兵器の歴史を
国民が知り学ぶ。さらに学んだものを、人から人に対話で伝えていく。という、世界としての共通認識
を持つための手順を行うことで、核兵器は廃絶へ向かっていくと思う。

実際に僕も G7 サミットが終わってから、学校の研修旅行として広島で、原爆について学ん
だ。僕もそれなりに原爆のことは知っていると思っていた。しかし、実際に原爆資料館に行き、数々の
資料を見て学んだり、被爆体験者の方のお話を聞く中で、想像を絶するものがあつた。現在、被爆
体験者の方の平均年齢は 84 歳を超え、被爆体験者の方の証言というのが少なくなっている。被爆
体験者の方は、

「広島に住む人でさえ、原爆の事実について曖昧になってきています。」

と語ってくれた。だからこそ、やはり対話による歴史のバトンを受け継いでいかなければならないと思
う。

対話という方法を使い、相手の意見を尊重した上で自分の意見を伝えられるのは、生物の中で
人間唯一の特徴であると思う。人間だからこそその強みであると思う。だがそれを使わなければ弱み

になると思う。お互いの強いプライドが譲らないとき、僕は昔から対話をしてきた。それは一見誰にでもできそうだが、大きな問題になればなるほど難しい。だからこそ世界規模で国際協力による勇気の対話を推進することで、大きな核廃絶という問題を解決する糧となると考える。